

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

駒形4-1地点

令和3年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺きょうぞうべつとうりょう経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』あづまかがみによって証明されています。平成17年には国史跡「骨寺村莊園遺跡」ほねでらむらしょうえん いせきに指定、18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村莊園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村莊園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、教育委員会では継続して調査研究を行っています。

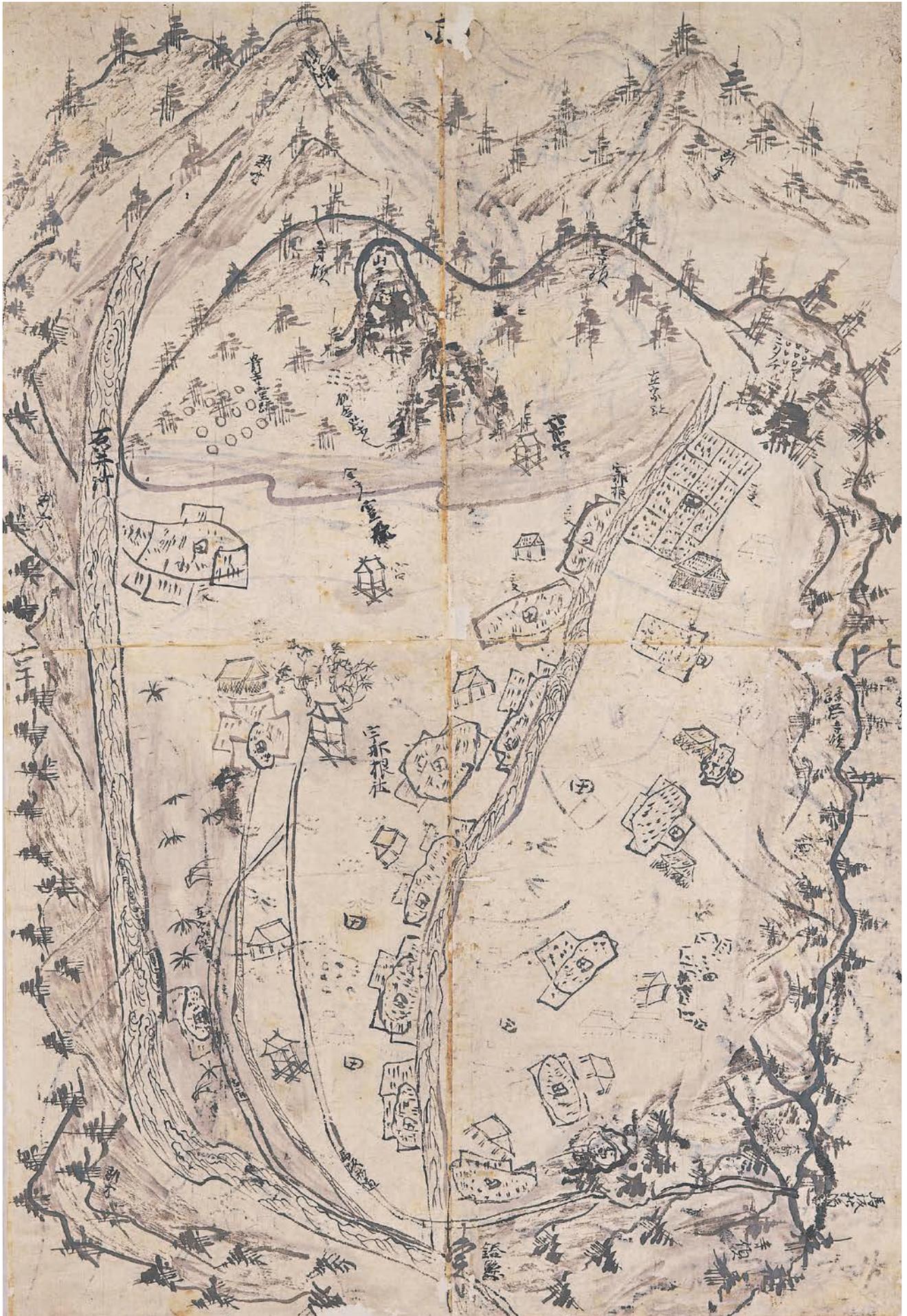
本年度は、国指定史跡「骨寺村莊園遺跡」のうち白山社及び駒形根神社の一部で確認調査を実施しました。本書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

令和3年3月

一関市教育委員会

教育長 小 菅 正 晴



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製） 原典は中尊寺蔵



駒形4-1地点遠景（矢印直下が調査区、南東から、無人航空機による空中撮影）



駒形4-1地点調査区全景（直上から、無人航空機による空中撮影）

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和2年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。
- 4 令和2年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」の範囲内の駒形4-1地点である。
- 5 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおり。

教育委員会	文化財課	課長	千葉	浩
		文化財係長	金野	修
		主任学芸員	菅原	孝明
		文化財調査研究員	光井	文行
			阿部	充
		会計年度任用職員	小岩	誠也
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。
- 8 本書図3に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。（許可番号 令和3年2月15日総第11016号）
- 9 土層断面図の土色表示は新版標準土色帖2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 10 調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は川嶋印刷株式会社に、調査補助及び調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、それぞれ委託した。
- 11 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土した石製品の石材鑑定については、佐々木繁喜氏（一関市文化財調査委員）の指導を頂いた。
- 12 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
及川幸子、小岩寿男、佐々木繁喜、佐々木光昭、佐藤健爾、佐藤信男、佐藤光雄、二階堂孝子、平山勇、吉田エルマノニアル
岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、文化庁、骨寺村ガイダンス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会

目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
2 調査に至る経緯	14
3 駒形4-1地点の調査	21
4 総括	26
遺物観察表	27
写真図版	28

1 位置と環境

(1) 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年（2011）9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」（昭和43年（1968））や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年）および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年（2006））、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年（1927））がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「猊鼻溪」（大正14年（1925））がある。

(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一）による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

(3) 歴史的環境

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺莊園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光じざいぼうれんこうという僧侶が、紺紙金銀字交書一切経こんしきんぎんじこうしよいつさいきょうを奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する讓状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年〔1318〕3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮は所領の安堵あんどを求めため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈祷料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸かぎかけ、西は山王窟さんのうのいわや、南は磐井川みたけどう、北は峯山堂（から）馬坂まさかである。

陸奥国骨寺村絵図 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年〔1699〕） 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串いっくし村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年〔1773〕） 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年〔1775〕） 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺はごうほんでら」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子」、^{わかみこ}「山王社、小名 山王山」、^{ふどうのいわや}「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である^{かんざんふどき}「関山風土記」には、^{じえづか}慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

（４）骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。平成21年度調査で逆茂木が残る^{おとしあな}陥穴を、22・23年度で楕円形の陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の堅穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの^{はじきすえき}土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器碗や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。^{とおにし}遠西遺跡からは、12世紀の^{なめようさんさんきんこ}常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の^{りゅうせんようけいせいじしのだれんべんもんわん}龍泉窯系青磁 鎗蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。^{おおほりそうまよう}大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の^{せとようさんとうみょうぐ}燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『^{ほうないふどき}封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定

が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1. 位置と環境」を引用、加筆)



若神子社と田植えを終えた水田

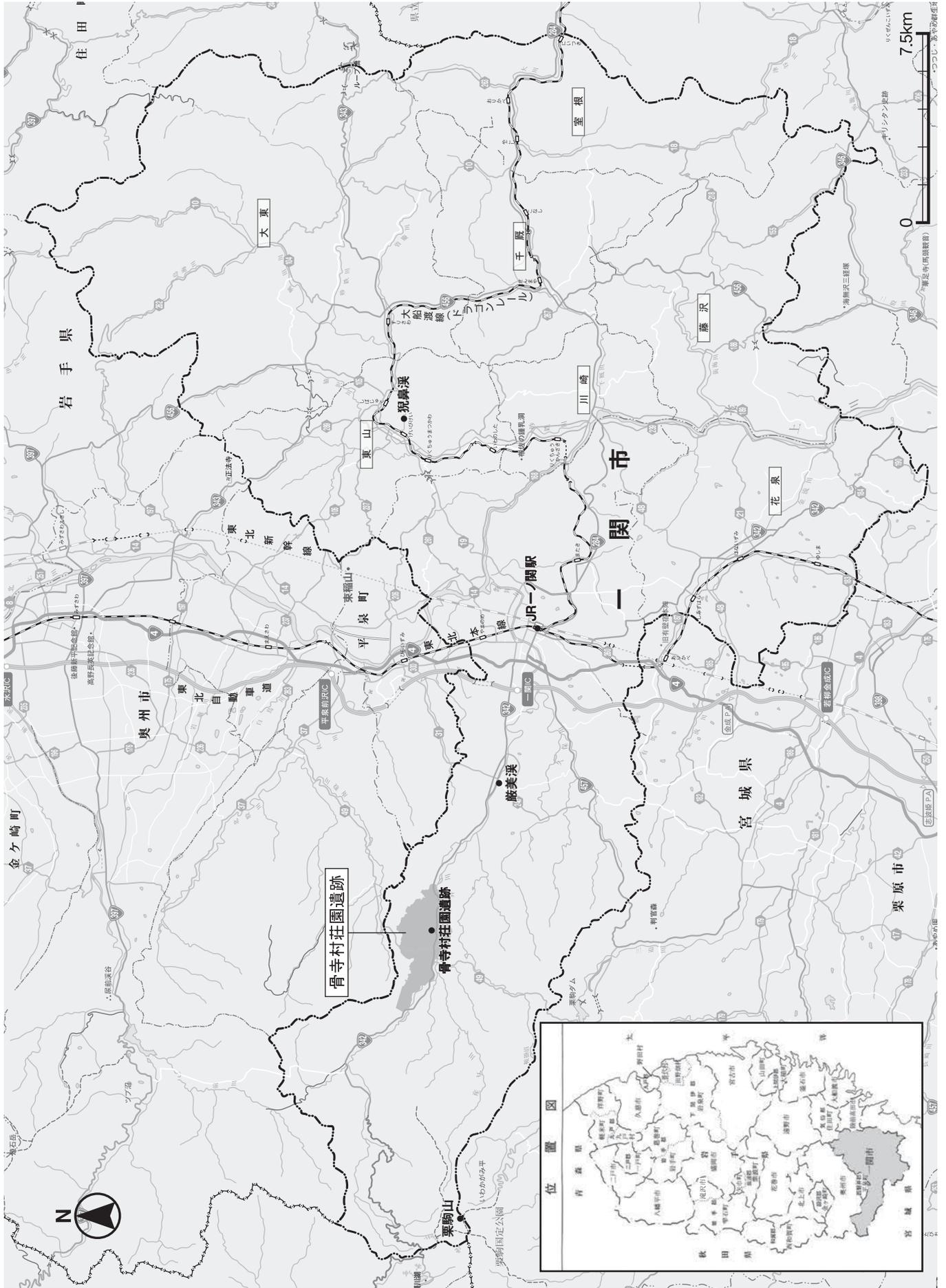


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

2 調査に至る経緯

(1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村 荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を 活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、 集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、 要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂（拝殿）)
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要文化的景観に選 定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産 条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉―浄土世界を基調とする文化的景観」と した世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方 約3km

平成20年 7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年 4月 4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年 1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年 9月 8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年 3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年 5月	イコモス「登録」を勧告
平成23年 6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田 a 火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年 5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年 1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年 1月 7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自然科学分析を実施、13世紀後半と推定

	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け 梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認 平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認 平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け 山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝2条、竪穴状遺構確認
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年3月7日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フラスコ状土坑確認 駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年3月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査、遺構は発見されず、自然科学分析を実施し縄文時代と推定
令和2年度	駒形4-1地点確認調査

(2) 令和2年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことは、遺構の時代も中世まで遡ることを示唆している。一方、宗教施設の調査については、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は7カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡（平泉町）、達谷窟（平泉町）、白鳥館遺跡（奥州市）、長者ヶ原廃寺跡（奥州市）の5つの拡張予定資産が、世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係区市町間で25～29年度の5カ年で重点調査を実施することを確認した。この重点調査で成果を積み重ねたが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らないとの結論に達し、関係区市町で30年度以降も調査を継続することで合意した。

令和2年度は、平成21年度からの発掘調査計画を改定した第2期計画（平成29～令和3年度）の4年目にあたる。また、上記のとおり関係区市町で拡張登録を目指す各資産で調査を継続することを取り決めていること、28年度の骨寺村荘園遺跡指導委員会で、平泉野台地の平場の際周辺の調査をすべきとの意見をいただいております。白山社東側の緩斜面にあたる駒形4-1地点の調査を実施した。

これまで（平成11～令和2年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（一関市教育委員会2020『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「2 調査に至る経緯」を引用、加筆）

（菅原）

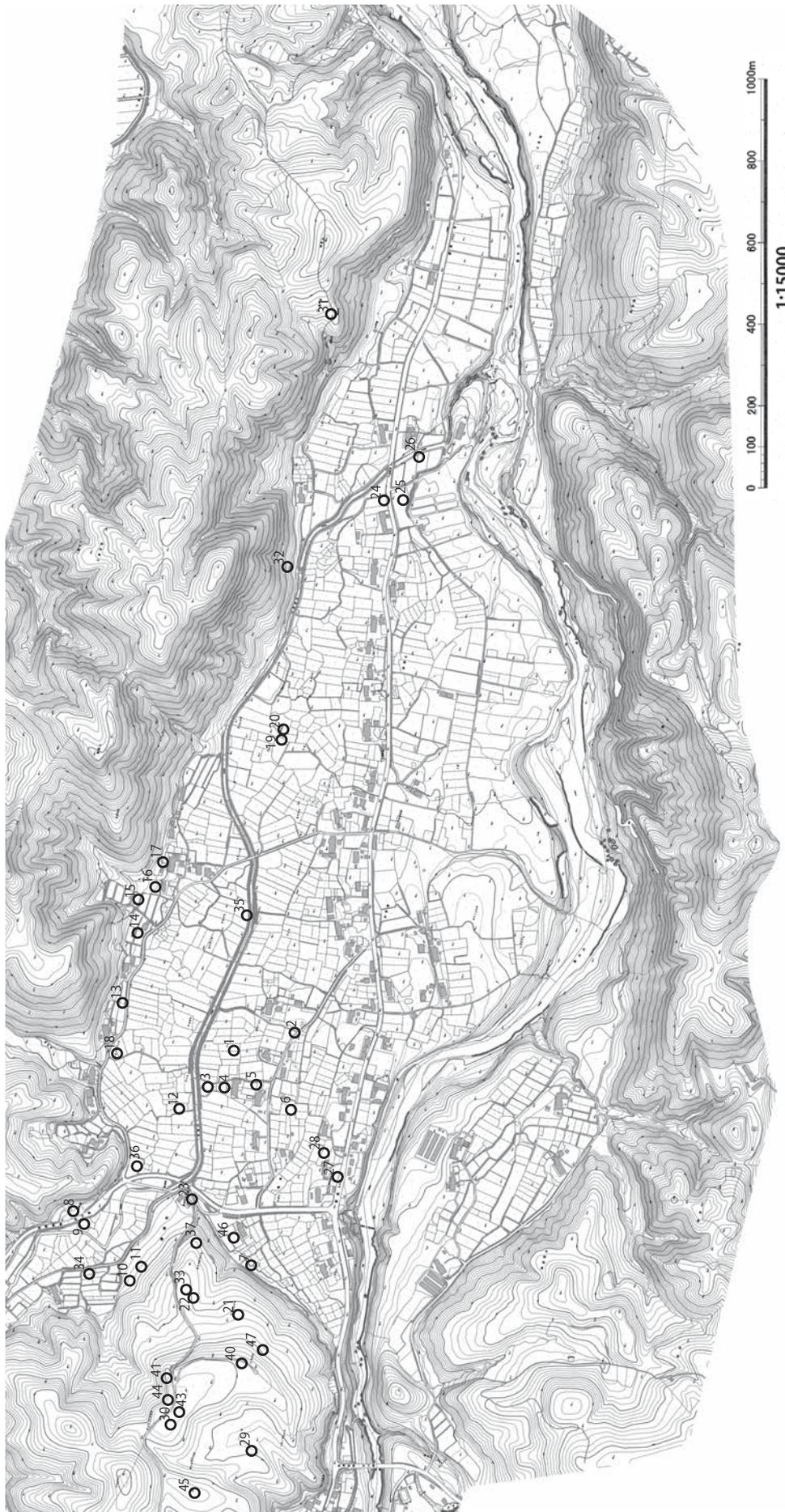


図2-1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点（1）

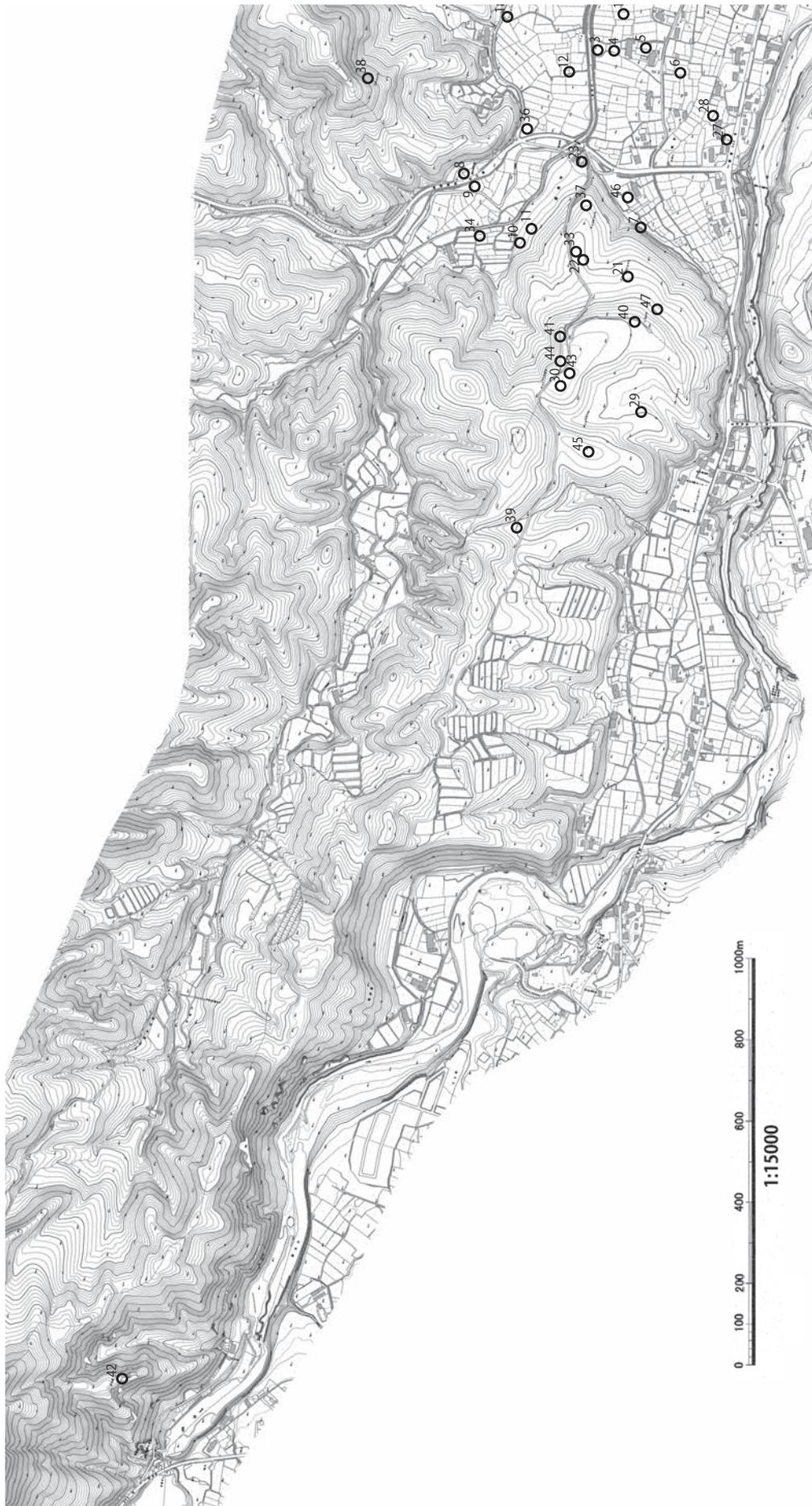


図2-2 骨寺村莊園遺跡における既調査地点（2）

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、銭	平成18年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度
47	駒形4-1	土坑、縄文土器片、礫石器、石製品	令和2年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

3 駒形4-1地点の調査

調査地点は、駒形根神社の南西約400mにあり、平泉野台地の一関市巖美町字駒形4-1に所在する(図3)。現白山社より約14m低いところに位置し、標高は約214~216mである。現況は、北西側が高く、南東側が低い中位段丘の斜面で、杉林であり、湿地である。これは、平泉野台地の東斜面から豊富な湧水が中位段丘に流れ浸みているためである。調査地区は中位段丘上位にあるため、常に水を十分に含み、歩くとズブズブとぬかる。

『陸奥国骨寺村絵図』(簡略図)によると、「骨寺跡」は「白山社」と「六所宮」との間に描かれている。「六所宮」を現駒形根神社に比定すると、「骨寺跡」は平泉野台地の東側斜面のどこかに位置すると推定される。また、絵図は西を天とする方位観で描かれており、かつて存在した骨寺が東面していたことを示し、おそらく里を見下ろす位置にあったと考えられている。さらに、里の西端には、絵図にも見える「寺崎」が屋敷名「テラサキヤシキ」として実在し、その名称はかつての骨寺にちなむものとみられる。したがって、骨寺は、上位面の東端に実在する白山社と寺崎の近在に位置したものと推定されている。

今回の確認調査は上記の推定から、平泉野台地の高位段丘の東側斜面にある中位段丘に再度着目し確認調査地を選定した。この中位段丘は、北側半分が北、東、南東の方向に舌状に伸びており、南側半分が高位段丘に沿う形でウナギ状に南に長く伸びている。中位段丘における過去の確認調査は、平成17・24・27年度に4地点(図2及び表1の21、22、33、37)で実施しているが、これらは中位段丘の北側半分に位置している。確認した遺構は炭窯、土坑、落とし穴、遺物は縄文土器、石器、石匙、石器、などであり、「骨寺跡」に伴う遺構、遺物は確認できていない。今回の調査地点は、今まで調査していない中位段丘の南側にあたり、現白山社の近在で、上位段丘と中位段丘の変換点に骨寺が立地していた可能性があると考えた。そこで遺構の有無、特に「骨寺跡」の痕跡を確認するために調査を実施した。

調査期間は令和2年11月9日~12月11日(実働16日)、調査面積は82㎡である。

調査地点は、平泉野台地からきつい傾斜の斜面を経て緩い斜面につながる中位段丘の最上位面で、等高線に並行する方向で幅約3m、長さ約27mの細長いトレンチを設け、調査した。

人力により、伐採した丸太を移動した後、表土、Ⅱ層を除去し、排水、排土の養生しながら遺構の確認を行った。遺構の確認面はⅢ層、Ⅳ層上面である。

図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフデジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基R2-1 X = -113724.521、Y = +9658.578、H = 214.593

基R2-2 X = -113693.200、Y = +9673.600、H = 214.344

調査の結果、遺構は土坑1基、遺物は、土坑から縄文土器片、Ⅱ層から石製品、Ⅲ層から礫石器が出土した。なお、調査終了後、残土を用いて、人力で埋め戻し、現状の回復を行った。

(1) 基本土層

- I層：10YR2/1黒色粘土質シルト。粘性あり。しまり極めて弱い。植物根、植物遺体を上位に多く含む。植物根、植物遺体多く含む上位とあまり含まない下位の細層に分かれるが、I層にまとめて取り扱った。表土。層厚約10～50cm。
- II層：10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性強くあり。しまり弱い。垂円礫（10～30cm大）を少量、石製品を含む。調査区南西端では層は浅い。層厚約10～30cm。
- III層：10YR3/1黒褐色粘土質シルト。粘性あり。しまり中。上位に垂円礫（10～30cm大）を多く含む。砂質土のブロックを少量含む。調査区南西側にのみ分布する。上位段丘の礫層起源のものである。縄文時代の礫石器も含む、層厚10～20cm。
- IV層：10YR7/1灰白色シルト。粘土質シルト。粘性強くあり。しまり極めて弱い。ローム層起源。わずかに上位に明黄褐色（10YR6/8）粘土質シルトを薄く含む。調査区全体にある。地山。層厚50cm以上。

(2) 確認した遺構と遺物

確認した遺構は土坑1基、遺物は石製品2点、縄文土器片1点、磨石1点、凹石1点である。

土坑 SK-1（図5、写真図版3-1・2）

土坑はトレンチ中央部の斜面下位、IV層上面で検出された。検出されたときは、明瞭に形状を把握できた。地山IV層がやわらく、しかも、水が湧いてたまる地点であった。精査の結果、土坑の形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は長径152cm、短径94cm、深さ18cmである。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトの単層で、灰白色（10YR8/2）粘土質シルトのブロックを少量含む。底面は浅皿状を呈し、凹凸がある。出土遺物は、埋土の中位から縄文土器片が1片（図5、写真図版3-5、表2）出土している。口縁部片で表面に単節（RL）の縄文が部分的に施文されている。縄文中期後半に位置づけられるものと考えられる。

遺構外出土遺物（図5、写真図版3、表3）

確認した遺物である石製品2点、礫石器2点の石質は、すべて巖美層起源の熔結凝灰岩である。石製品1（図5、写真図版3-7、表3）はトレンチ西側端部のII層上部、石製品2（写真図版3-8、表3）はトレンチ中央部のII層上部から出土している。石製品1は、扁平な不整四角形を呈し片側が欠損している。溶結凝灰岩を丁寧に加工して厚さ約4cmの板状に加工され側面も平坦にならして作られている。片面には、円形状に（半径7～8cm、深さ0.1～0.3cm）一段低く掘り下げている。その面は、円弧寄りに幾分傾斜している。柱を据える礎石とも考えたが、丁寧に加工されていることや、厚さが薄いことなどから可能性は低いと考えられる。したがって、用途について不明である。時期についても、共伴遺物もなく、出土したII層の年代も幅があり不明である。石製品2は、扁平な不整な長楕円形を呈している。外面は一部加工して平坦にしている。片面は中央部が浅皿状に（長径20cm）にくぼんでいる。形態や大きさから礎石とも考えられるが、縄文時代に台石として使用されたものを再利用した可能性もある。したがって、用途は不明で、時期も石製品1と同様な理由でわからない。礫石器3、4はトレンチ南西側端部のIII層上面から高位段丘の構成礫層起源の垂角礫と共伴して出土している。礫石器3（写真図版3-6の左側、表3）は2面に使用痕を持つ楕円形状の磨石である。礫石器4（写真図版3-6の右側、表3）は中央部に径2.3cm×2.7cm、深さ1.1cm大きさの円形状のくぼみを持つ、扁平な凹石である。礫石器3、4は縄文時代のものと考えられる。

（光井）

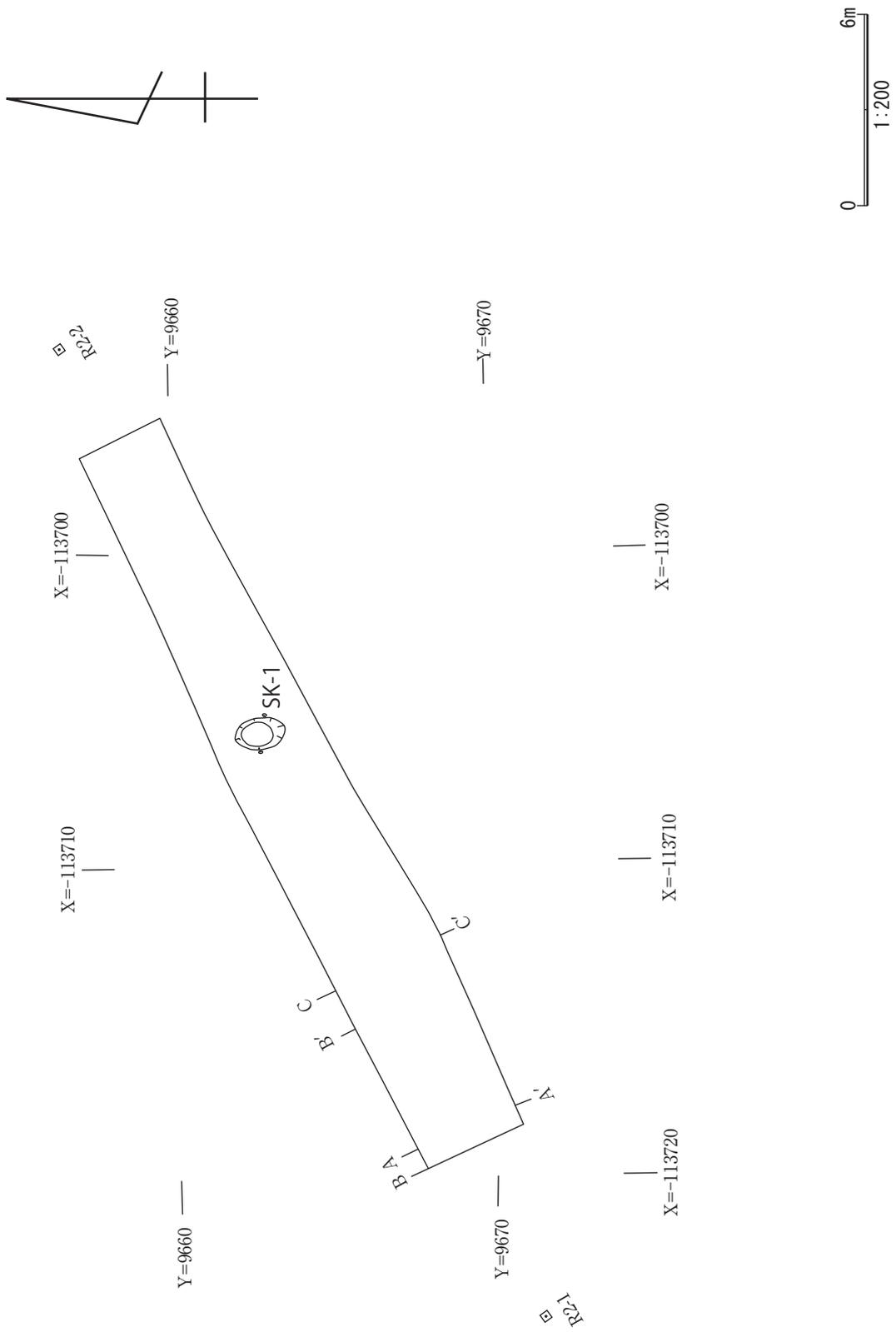
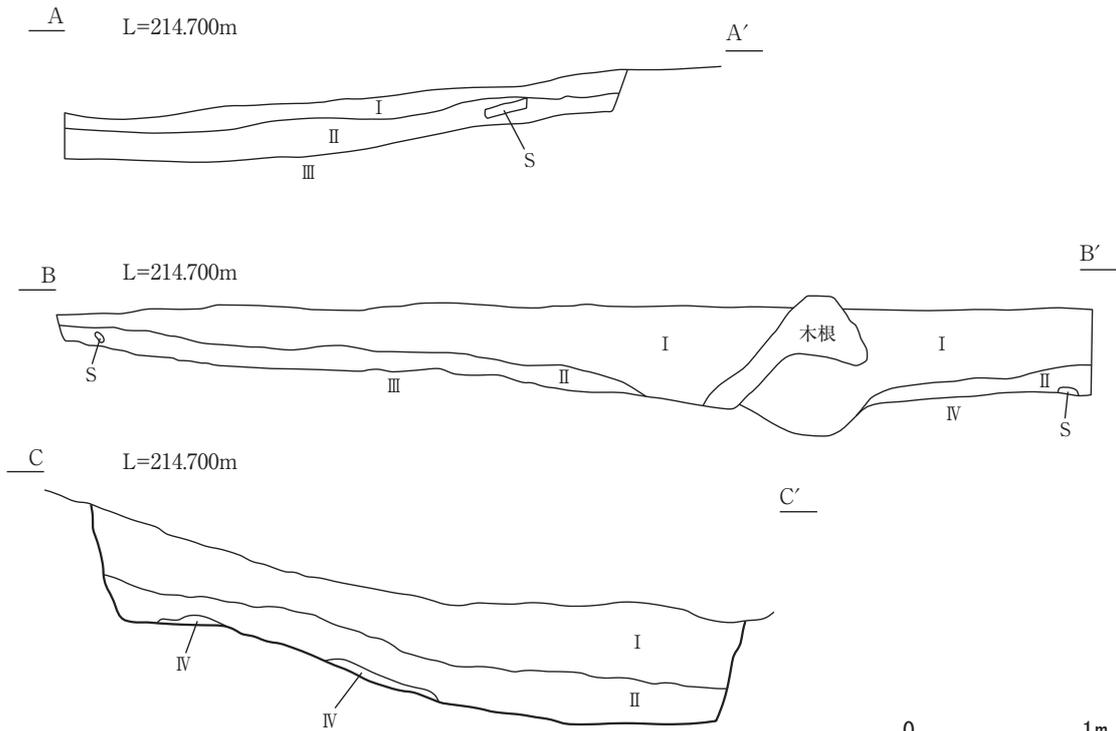


图4 調査区平面図

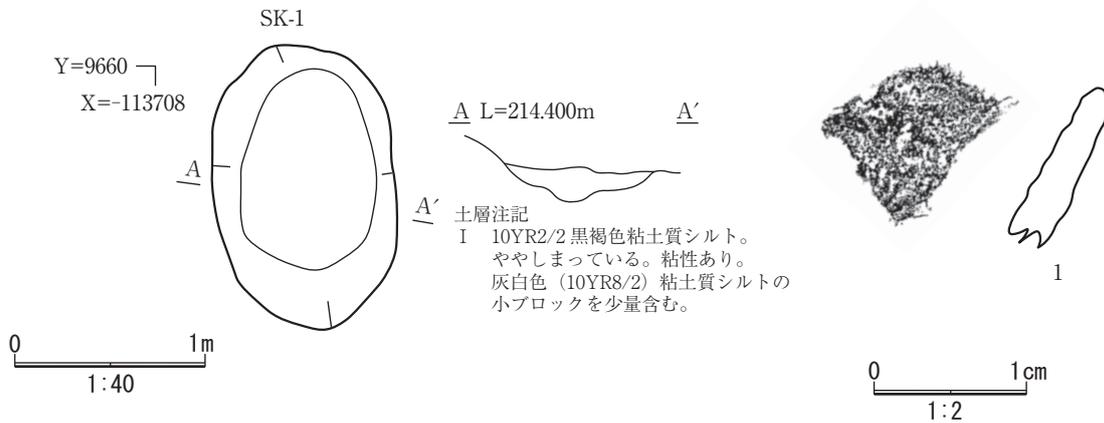
土層断面



土層注記 (A-A', B-B', C-C')

- I 10YR2/1 黒色粘土質シルト。しまり極めて弱い。粘性あり。植物根を多く含む。
- II 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまり弱い。粘性強くあり。石製品を含む。
- III 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。しまり中。粘性あり。礫石器、亜円礫を多く含む。
- IV 10YR7/1 灰白色粘土質シルト。しまり極めて弱い。粘性強くあり。

SK-1



遺構外出土遺物

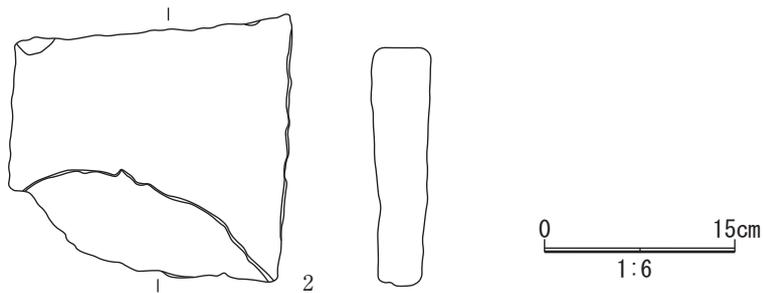


図5 調査区土層断面図、SK-1平面・断面図、遺物、遺構外出土遺物

4 総括

本年度は、平泉野台地の東側斜面にある中位段丘の南半部分を調査した。その結果、時期不明の石製品、縄文時代の土坑、土器片、礫石器を確認した。

白山社周辺では、平成28年度に縄文時代の住居跡を複数確認しており、今回の調査地点はそこから10m程標高が低い場所にある。このことから、確認した遺構・遺物は、平泉野遺跡と関わりがあると考えられる。

調査の目的である、「陸奥国骨寺村絵図」にある「骨寺（堂）跡」等の痕跡を確認することはできなかった。

(菅原)

【参考文献】

- 一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.
- 一関市教育委員会2018『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.
- 一関市教育委員会2019『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.
- 一関市教育委員会2020『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.
- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会.
- 入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか—骨寺村絵図研究の過去・現在・未来（1）—」一関市博物館研究報告第19号.
- 入間田宣夫2019『中尊寺領骨寺村絵図を読む～日本農村の原風景をもとめて～』高志書院.
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号.
- 黒田日出男1995「陸奥国中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社.
- 島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 関根達人2009「北奥の—二世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会.
- 土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館.
- 平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房.
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森.

No.	遺構・層位	種類	器種	部位	年代	備考	図版
1	SK-1 埋土	縄文土器	鉢	口縁	縄文中期後半	単節（RL）の縄文を施文	図5 写真図版3-5

表2 出土土器観察表

No.	出土位置・層位	器種	備考	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	石材	時代・産地	図版	写真
1	Ⅱ層 上部	石製品	時期不明	22.0	21.0	4.0	3.8	熔結凝灰岩	新第三紀 中新世 巖美層	図5	3-7
2	Ⅱ層 上部	石製品	時期不明	25.0	14.0	4.5	2.5	熔結凝灰岩	新第三紀 中新世 巖美層	-	3-8
3	Ⅲ層 上部	凹石	縄文中期	33.5	27.0	6.0	9.1	熔結凝灰岩	新第三紀 中新世 巖美層	-	3-6
4	Ⅲ層 上部	磨石	縄文中期	14.5	8.5	5.5	1.0	熔結凝灰岩	新第三紀 中新世 巖美層	-	3-6

表3 出土石製品・石器観察表



1 完掘状況（南西から）



2 完掘状況（北東から）



1 完掘状況（北西から）



2 完掘状況（東から）



3 完掘状況（南から）



4 完掘状況（南から）



5 土層断面（A-A'）（北東より）



6 土層断面（B-B'）（南東から）



7 土層断面（C-C'）（南西から）



8 発掘調査状況（南西から）



1 SK-1 埋土断面 (南東から)



2 SK-1 完掘 (南東から)



3 石製品出土状況 (南東)



4 石製品、礫石器出土状況



5 SK-1 出土遺物 (縄文土器片)



6 遺構外出土遺物 (凹石、磨石)



7 遺構外出土遺物 (石製品)



8 遺構外出土遺物 (石製品)

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村莊園遺跡確認調査報告書							
副書名	駒形4-1地点							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	菅原孝明・光井文行・阿部 充							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL0191-26-0820							
発行年月日	2021年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村莊園	いちのせきしげん びちょうあざ 一関市巖美町字 こまがた 駒形4-1	03209	NE72- 2283	38° 58' 35"	140° 56' 55"	20201109 ～ 20201211	82㎡	確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
骨寺村莊園	莊園	縄文、古代、 中世、近世、 近代	土坑	縄文土器片 礫石器 石製品				
要約	<p>本年度は、白山社東側斜面の角度が緩やかな部分について調査を実施した。その結果、遺構は土坑1基、遺物は縄文土器片や礫石器を確認した。</p> <p>白山社周辺では、平成28年度に縄文時代の住居跡を複数確認しており、今回の調査地点はそこから10m程標高が低い場所にある。確認した遺構・遺物は、平泉野遺跡と関わりがあると考えられる。</p>							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第32集
骨寺村莊園遺跡確認調査報告書
駒形4-1地点

発行年月日 令和3年3月22日

発行・編集 一関市教育委員会
〒021-8503
岩手県一関市竹山町7-5
電話 (0191) 26-0820

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 (0191) 46-4161(代)